

第 3 章

ナショナル・アイデンティティと自己愛 —愛国心とナショナリズムの差異に注目して—

中 村 晃

目 次

要旨

1. 問題と目的

2. 方法

3. 結果と考察

4. 総合考察

要旨

本研究では、ナショナル・アイデンティティの主要な構成要素である愛国心とナショナリズムの2側面に焦点を当て、この2側面と自己愛、自尊感情、および仮想的有能感がどのように関連するかを検討することを目的とした。調査方法に関しては、大学生240人を対象とし、ナショナル・アイデンティティと自己概念に関する質問から構成される質問紙調査を行った。その結果、調査対象者の9割以上が愛国心を質問する項目に対して肯定的に答えているが、ナショナリズムに関しては、愛国心ほどは肯定する人は多くなく、露骨に自国の優越性を表明する人は少数派であることが示された。また、愛国心得点に関しては平均より高い群と低い群の2群に、ナショナリズム得点の得点に関しても平均より高い群と低い群の2群に分け、自己概念を従属変数とした2要因2水準（愛国心（高群・低群）×ナショナリズム（高群・低群））の分散分析を行った。その結果、愛国心の高さに関しては、自尊感情の高さとのみ関連が示された。自尊感情は適応性の指標として使われることが多いが、愛国心の高さが自尊感情の高さと関連したことは、愛国心が精神的健康と関連する可能性が考えられた。一方、ナショナリズムの高さは自己愛の高さと仮想的有能感の高さと関連し、自尊感情の得点とは関連が見られなかった。このことからナショナリズムが不適応性と関連することが示唆された。またEUの中心国であるドイツとの比較から、ナショナリズムの強さに対して自国の歴史に対する誇りが大きな影響を与える可能性が示唆された。

1. 問題と目的

現在、日本ではナショナリズムの問題が重要な課題になっている。ナショナリズムは国家主義、あるいは民族主義と訳されるが、自らが所属するネイション（民族・国民・国家）を尊重する意識と行為の一般であるとされている（大澤・塩原・橋本・和田，2014）。

たとえば日本におけるナショナリズムに関する問題として、竹島や尖閣諸島、あるいは北方領土をめぐる領土問題があり、その解決は困難をきわめ、多くの関心ははらわれている。また若年労働力が失われていく日本の社会において、他国からの移民の受け入れの増加を日本政府は検討しているが、外国人が増加することに対する文化摩擦や治安悪化への懸念があり、どのように行っていくのか議論がされている。あるいは、近年日本国内においても、特定の人種や民族への憎しみをあおるような差別的表現（ヘイトスピーチ）が問題視されるようになってきている。また、国を愛する態度の育成については教育現場でも

盛んに議論されており、教育基本法や学習指導要領において、愛国心の育成をどの程度盛り込むか、あるいは日の丸の掲揚や君が代の斉唱を学校の式典で実施するかどうかについて、これまで長く論争されてきた。

このように、ナショナリズムに関して現在の日本では様々な問題を抱えているが、一方そのような問題に対する個人の態度もそれぞれである。日本の領土を守ることや日本の優位性を主張することに熱心で積極的な人もいれば、日本の「国」そのものにこだわらない人もいる。このような、自国に対する態度を、ナショナル・アイデンティティとよぶ。

アイデンティティとは自己同一性と訳されるが、一般に自分が何者であるかに対する自己定義のことをあらわす。またアイデンティティの中でも、自分と自分の所属集団を同一視し、自分自身を集団の一部として自覚することを、社会的アイデンティティと定義されている。社会的アイデンティティの基盤としては、国家、民族、宗教、性別、職業、学歴などの社会集団があげられるが、その中でも、国家から得られる社会的アイデンティティであるナショナル・アイデンティティは、現実社会における問題と関連が深く、重要であるとされている（唐沢、1993）。実際、他の集団的アイデンティティに比べて、ナショナル・アイデンティティは同定する対象への非常に強力な感情や熱狂が形成されやすいことが指摘されている（田辺、2010）。

このナショナル・アイデンティティを、坂西・王（2007）は、「国家」に対する価値の内面化（「国」・「国家」に対する態度の形成ともいえよう）の程度を反映する自己概念と定義している。また真鍋（1999）は「自己をネーション（国民・民族）に同一化することによってできあがる確信や感情のこと」と定義している。一方、田辺（2010）はナショナル・アイデンティティを「自己を自身の属するネーション（国）に対して一体化させることを通じて形成される意識・信念・感情」と定義した。いずれも、ナショナル・アイデンティティを自分の属する国に対する態度や意識としてとらえている。

さらに、このナショナル・アイデンティティの構造に関しては、さまざまな研究が積み重ねられてきている。例えば、田辺（2010）は、ナショナル・アイデンティティを(1)ネーションの成員条件：何者をネーションの一員とみなし、どんな属性の人々をネーションの一員を認めないか、その条件の基準、(2)ナショナル・プライド：自分のネーションに関わる様々な事柄に対する誇りや自負心、(3)自国中心主義：自分のネーションを他のネーションよりも優先にして考え、かつ中心的にみなす感情、自民族中心主義（ethnocentrism）、(4)排外性：自分のネーションに属さない人々を危険視し、自己のネーションにとってマイナスな存在とみなし、その様な人々を排斥する意識、の4つの下位概念から構成されるとしている。

一方, Dowds & Young (1997) は, ナショナル・アイデンティティをネーションへの誇りやナショナルな共同体へ他者を受け入れるような「包摂的ナショナリズム」(Inclusive nationalism) と外部者への攻撃性や他者の加入を拒むような「排他的ナショナリズム」(Exclusive nationalism) に分類している。

また, Kosterman & Feshbach (1989) によるとナショナル・アイデンティティには日米共通の因子として, 愛国心 (patriotism, 自国に対する愛着), ナショナリズム (nationalism, 自国の優越性, 優位性に関する意識), 国際主義 (internationalism, 国益に一致しなくても貧しい国と富を分かすべき) の3因子が確認されたと報告している。

この愛国心とナショナリズムに関して, Karasawa (2002) は日本人の場合, 愛国心は日本の肯定的イメージに結びつくことに対し, ナショナリズムは否定的外国イメージに結びつくことを報告している。さらに愛国心とナショナリズムの違いに関して, 日本の文化や歴史あるいは国際関係に関する知識がある人ほど愛国心は高いが, 一方ナショナリズムに関しては低くなる傾向が示された (唐沢, 1993)。

ここで, 田辺 (2010) による「ナショナル・プライド」や Dowds & Young (1997) のいう「包摂的ナショナリズム」は Kosterman & Feshbach (1989) や Karasawa (2002) の研究における「愛国心」に近い概念と捉えられる。一方, 田辺 (2010) による「自国中心主義」と「排外性」や, Dowds & Young (1997) における「排他的ナショナリズム」は Kosterman & Feshbach (1989) や Karasawa (2002) の研究における「ナショナリズム」にほぼ相当する概念と考えられる。つまり, ナショナル・アイデンティティには共通して愛国心とナショナリズムの2要因があることが示された。そこで本研究では, ナショナル・アイデンティティの主要な構成要素である愛国心とナショナリズムの2要因に焦点を当てる。

また, アイデンティティとは自分が何者であるかに対する自己定義であるが, その自分に対する愛情は自己愛とよばれる。自分が何者であるかということと, 自分に対する感情は, 関連があることが考えられる。先に述べたように, 自分が所属する国に対する愛情は愛国心であるが, それと自分自身に対する愛情である自己愛はどのように関連するのであろうか。Akhtar & Thomson (1982) は自己愛を自己に対する心理的関心の集中と定義している。自分に対する愛情である自己愛が強ければ, 自国に対する愛情である愛国心も強くなるのであろうか。あるいは自分に対する愛情が強いため自分自身に対して愛情が集中するために, 自分の国に対しては愛情を持つに至らないのであろうか。Freud (1914) は自己愛をリビドーが自己に集中することとしているが, Freud の理論に従うと自己愛の強い人はリビドーが自己に集中することにより, 自分の所属する国に

対してはリビドー備給されず、したがって愛国心は少なくなることが考えられる。一方、Kohut (1971) の理論では、なんらかの一体感を通して、自分の自己愛を充たしてくれるように体験される対象を自己対象とよぶ。もし、自己愛が強く自分の所属する国を自分の一部のように一体感を感じ自己対象としてとらえているのであれば、愛国心が強くなることが考えられる。あるいは、自己愛が強いと他者に関心が向かず自分だけに愛情が注がれるが、これが自分の国に対する感情にも反映すると、自分の国にのみ排他的愛情を注ぐことにつながり、それがナショナリズムの高さを引き起こすことも考えられる。

また自己愛の他に、自己に対する感覚や感情における重要な概念として、自尊感情がある。自尊感情は自己愛と同義である (Freud, 1914) とする研究者と、自己愛は自尊感情を調節する機能である (Stololow, 1975) とする研究もあり、意見が分かれている。また、遠藤ら (1992) は自尊感情は自分に対してどのように感じるかその感じ方であり、自尊感情を「自己の価値と能力の感覚、感情」と一般に定義されると述べている。自己愛は一般的に病理的な側面が強調される一方、自尊感情は適応性の指標とされることが多い。そこで、本研究では自尊感情の適応的な側面に焦点を当てた遠藤の定義にならい、自尊感情を「自己の価値と能力の感覚、感情」と定義する。自己を価値あるものとする自尊感情が高ければ、自分の国に対する自信にもつながり、それが愛国心を高めることが考えられる。しかし、自尊感情は自分に対する価値があると感じる感覚であるが、他者に対する優越感や排他性は含まれていない。そのため、ナショナリズムとは関連しないことが予測される。

また自国に対する優越感がナショナリズムであるが、自分自身に対する根拠のない優越感とは仮想的有能感として知られている。速水 (2004) は、仮想的有能感を自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚と定義している。また仮想的有能感と自己愛は類似しているが、自己愛は必ずしも初めから他者軽視が想定されているわけではないこと、および自己愛はより広い概念であることが両者の違いであると述べている。さらに、仮想的有能感の高い者は、友人が少なく共感性も低いため、対人関係における不適応と関係することが報告されている。自分に対する根拠のない優越感である仮想的有能感が高い者は、自分の所属する国に対する優越感であるナショナリズムも高くなることも考えられる。しかし、一方で仮想的有能感は自分に対する優越感のみに限定され、自分の所属する国に対しては優越感を抱かないか、あるいは自分の所属する国を自分ではない他者とみなし、そのため批判的に評価してかえって愛国心が低いことも考えられる。

このように、自分に対する感情である自己愛、自尊感情や仮想的有能感は自分の所属する国に対して感じる愛国心やナショナリズムと関連があると考えられる。しかし、両者の

関連を検討した研究はこれまでみあたらない。

そこで本研究では、ナショナル・アイデンティティの主要な構成要素である愛国心とナショナリズムの2側面に焦点を当て、この2側面と自己愛、自尊感情、および仮想的有能感がどのように関連するかを検討することを目的とする。

2. 方法

調査対象者：関東にある4年制の大学で、心理学関連の講義を受講している大学生240人（男性174人（72.5%）、女性66人（27.5%））を調査対象とした。

調査時期：調査は2013年から2015年にかけて実施した。

調査内容：ナショナル・アイデンティティと自己概念に関する質問から構成される質問紙調査を行った。

(1) ナショナル・アイデンティティの測定

村田（2007）が作成した愛国心尺度とナショナリズム尺度の短縮版（佐久間・藤島，2011）を用いた。愛国心尺度は5つの質問項目、ナショナリズム尺度は4つの質問項目から構成され、それぞれの質問項目に対して、1（全くそう思わない）から5（非常にそう思う）の5件法で回答を求めた。愛国心尺度は5-25点の得点範囲であり、得点が高いほど愛国心が強いのを示す。ナショナリズム尺度は4-20点の得点範囲であり、得点が高いほどナショナリズムが強いのを示す。

(2) 自己愛の測定

小塩（1998）が作成した自己愛人格目録短縮版（NPI-S）を用いた。この尺度は30項目が含まれ、それぞれの質問項目に対して、1（全く当てはまらない）から5（とてもよく当てはまる）の5件法で回答を求めた。なおこの尺度は、自分が他者から注目されたり賞賛されたりすることを期待する度合いを表す、注目・賞賛欲求（10項目）、自己肯定感や自分の能力に対する誇大な感覚の強さを表す、優越感・有能感（10項目）、自分の意見をはっきりと言い自ら決断する傾向をあらわす、自己主張性（10項目）の3つの下位尺度から構成され、それぞれの下位尺度は10-50の得点範囲であり、得点が高いほどその特性が高いことを示す。また30項目の合計得点を、自己愛総合得点とした。自己愛総合得点は30-150点の得点範囲であり、得点が高いほど自己愛が強いのを示す。

(3) 仮想的有能感の測定

速水（2004）が作成した仮想的有能感を用いた。この尺度は11項目が含まれ、それぞれの質問項目に対して1（全く思わない）から5（よく思う）の5件法で回答を求め、その

合計得点を仮想的有能感得点とした。仮想的有能感得点は11-55点の得点範囲であり、得点が高いほど仮想的有能感が強いことを示す。

(4) 自尊感情の測定

Rosenberg (1965) により作成され、山本・松井・山成 (1982) が邦訳した、自尊感情尺度を用いた。この尺度は10項目が含まれ、それぞれの質問項目に対して1 (全くあてはまらない) から5 (とてもよくあてはまる) 5件法で回答を求め、その合計得点を自尊感情得点とした。自尊感情得点は10-50点の得点範囲であり、得点が高いほど自尊感情が強いことを示す。

3. 結果と考察

(1) 各尺度の平均値、および男女差

各尺度の男女別得点、および標準偏差を Table 1 に示す。t 検定により各尺度の男女差を検討したところ、仮想的有能感にのみ有意な差がみられ、男性の方が女性より得点が高かった ($t(238) = 3.22, p < .05$)。それ以外の尺度では、男女間に有意な差はみられなかった。なお、自己愛に関しては、一般的に男性の方が女性よりも高得点を示すことが多いが、本研究では自己愛に関して有意な男女差は見られなかった。各尺度における信頼性係数 (Cronbach の α 係数) を算出したところ、ナショナリズム尺度における α 係数が低めでは

Table 1 各尺度得点の男女差および信頼性係数

	男性 n=174	女性 n=66	全体 n=240	t 値 d.f.=238	得点範囲	α
愛国心	21.3 (3.42)	21.2 (2.64)	21.3 (3.22)	0.16	5 - 25	.81
ナショナリズム	13.9 (2.74)	13.7 (1.94)	13.8 (2.54)	0.72	4 - 20	.60
自己愛総合	85.0 (17.4)	82.4 (11.7)	84.3 (16.1)	1.33	30 - 150	.89
注目賞賛	30.4 (8.28)	28.5 (6.24)	29.9 (7.80)	1.91	10 - 50	.86
優越有能	24.6 (6.59)	24.3 (5.45)	24.5 (6.29)	0.37	10 - 50	.83
自己主張	30.0 (6.56)	29.7 (5.21)	29.9 (6.22)	0.35	10 - 50	.76
仮想的有能感	31.0 (7.09)	27.8 (6.71)	30.1 (7.12)	3.22**	11 - 55	.81
自尊感情	28.4 (6.24)	30.2 (6.91)	28.9 (6.46)	1.85	10 - 50	.79

** $p < 0.1$

(カッコ内は標準偏差)

あったが、すべての尺度において十分な信頼性が確認できた。

(2) ナショナル・アイデンティティと自己愛、仮想的有能感、および自尊感情との関連

ナショナル・アイデンティティの構成要素である愛国心やナショナリズムと、自己愛や仮想的有能感および自尊感情といった自己概念との関連を、pearsonの積率相関係数を算出して検討した (Table 2)。

その結果、自己愛総合得点と愛国心およびナショナリズム得点には正の相関が認められた。下位尺度別に検討すると、注目・賞賛欲求および優越感・有能感とは愛国心とナショナリズムどちらも有意な正の相関が示されたが、自己主張性ではナショナリズムにのみ有意な正の弱い相関が示された。

自己愛総合得点は自己愛の強さを表すが、自分に対する愛情や関心の強さが、自分の国に対する愛情である愛国心の強さにつながることを示された。また自分の国に対する愛情のみでなく、自分の国に対する優越性であるナショナリズムの高さにもつながることが示唆された。

自己愛の下位尺度の中でも、注目・賞賛欲求は不適応的側面に、優越感・有能感や自己主張性は適応的側面との関連が深いことがこれまで示されている (小塩, 2001)。注目・賞賛欲求には自分が他者から注目されたり賞賛されたりすることを期待する度合いであるが、その背後には自分が特別であるという認識があることが要因として考えられる。そのため、注目・賞賛欲求が強いと自分が所属する国に対しても特別であるという思いが強くなり、愛国心やナショナリズムの強さにつながると考えられる。優越感・有能感は自己肯定感や自分の能力に対する誇大な感覚の強さであるが、この優越感・有能感の他者より優れている、という感覚がそのまま自分の所属する国にも反映し、自国が他の国よりも優れているという認識につながったため、ナショナリズムの高さとリンクしたと考えられる。一方、自己主張性は自分の意見をはっきりと言い、自ら決断する傾向をあらわすが、自己主張性と愛国心とは有意な関連が見られなかった理由としては、自己主張性の高い人は自分は自分であり、自国に対する所属感が強くないために、愛国心との関連が見られなかった可能性が考えられる。

仮想的有能感とナショナル・アイデンティティの関連を検討したところ、仮想的有能感と愛国心とは有意な相関がみられなかったが、一方ナショナリズムとは有意な正の相関が示された。仮想的有能感とは、他者の能力を低く見積もり自分を高く評価する感覚であるが、自分の国に対する態度もこの感覚が生じるために、愛国心ではなく自分の国に対する優越感であるナショナリズムの高さにつながったと考えられる。

自尊感情とナショナル・アイデンティティの関連を検討したところ、自尊感情と愛国心およびナショナリズム得点の両方と正の相関が認められた。つまり、自分を価値あるものとしてとらえている人ほど、自分の国に対する愛着心も強く、他より優れていると感じていることが示された。自尊感情は自分に対する感じ方であり、自分に対する積極的な肯定感である積極的自尊感情と、これで良いといった感情を伴った自己受容的な消極的自尊感情の2側面があることが指摘されている（遠藤ら、1992）。本研究ではこの自尊感情の2側面については扱わなかったが、消極的自尊感情は特に愛国心と関連し、積極的自尊感情がナショナリズムと関連することも考えられる。

なお、愛国心とナショナリズムには有意な正の相関がみられたため ($r=.49, p<.001$)、愛国心が強いほどナショナリズムの傾向が強くなることが示された。これは、愛国心得点とナショナリズム得点に中程度の正の相関がみられたという佐久間・藤島（2011）の報告と一致した。つまり、ナショナル・アイデンティティの二つの要因は互いに独立ではないことが示唆された。そのために、愛国心とナショナリズムの両方に対して自己愛や自尊感情と有意な相関関係がみられた要因の一つと考えられる。

また、香山（2002）はプチナショナリズムという概念を提唱しており、最近の日本人若年層に見られる、屈託のない、平然とした日本至上主義ないし国家主義としている。香山はこのプチナショナリズムが、排他主義的国家主義につながる危険性を指摘しているが、愛国心の強い者がナショナリズム傾向が強いという本研究の結果は、このプチナショナリズムの特徴を反映していることも考えられる。

しかしここで注意しなければならないのが、愛国心の得点に関しては、分布に大きな偏りがみられたことである。愛国心得点は得点範囲が5点から25点であるが、平均点が21.3点、標準偏差が3.22であり、さらに25点満点が全体の24%（240人中57人）と、分布が高得点側に非常に偏り、天井効果が生じていると考えられた。そのため、愛国心の強さと自己概念の関連が相関係数にうまく反映されていない可能性も考えられる。

Table 2 ナショナル・アイデンティティと自己愛、仮想的有能感、および自尊感情の相関係数

	愛国心	ナショナリズム
自己愛総合	.21**	.26***
注目・賞賛	.25***	.24***
優越・有能	.13*	.23***
自己主張	.11	.14*
仮想的有能感	-.01	.16*
自尊感情	.17**	.23**

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

(3) 愛国心とナショナリズムのバランスと自己愛、仮想的有能感、および自尊感情の関連

以上で述べたように、愛国心得点の分布に関しては大きな偏りがみられ、相関係数を用いた分析には問題があった。そこで、ナショナル・アイデンティティと自己概念の関連をより詳細に検討するため、愛国心得点に関しては平均より高い群（22点以上、 $n=118$ ）と低い群（21点以下、 $n=122$ ）の2群に、ナショナリズム得点の得点に関しても平均より高い群（14点以上、 $n=127$ ）と低い群（13点以下、 $n=113$ ）の2群に分け、自己概念を従属変数とした2要因2水準（愛国心（高群・低群）×ナショナリズム（高群・低群））の分散分析を行った（Table 3）。

まず、自己愛総合得点について2要因2水準の分散分析で検討したところ、有意な交互作用は認められなかった。そこで、2要因の主効果を検討したところ、愛国心の主効果は認められず、ナショナリズムの主効果のみがみられた（ $F(1,235)=5.57, p<.05$ ）。つまり、自己愛総合得点に関しては、愛国心の高低では差が見られず、ナショナリズム高群の方が低群に比較して得点が高いことが示された。

また、自己愛の下位尺度別に検討したところ、どの下位尺度でも有意な交互作用および愛国心の主効果は認められず、ナショナリズムに関しては、注目・賞賛欲求では有意な主効果（ $F(1,236)=4.59, p<.05$ ）、優越感・有能感と自己主張性では有意傾向の主効果（ $F(1,236)=3.11; F(1,235)=2.79$,ともに $p<.10$ ）が示された。つまり、自己愛の各下位尺度に関しても、愛国心の高低では差が見られず、ナショナリズム高群の方が低群に比較して得点が高いことが示された。

次に、仮想的有能感について同様に2要因2水準の分散分析を行って検討した。その結果、有意な交互作用は認められなかったため、2要因の主効果を検討したところ、愛国心の主効果は認められず、ナショナリズムの主効果のみがみられた（ $F(1,236)=5.83, p<.05$ ）。つまり、仮想的有能感に関しても、愛国心の高低では差が見られず、ナショナリズム高群の方が低群に比較して得点が高いことが示された。

さらに、自尊感情について同様に2要因2水準の分散分析を行って検討した。その結果、有意な交互作用は認められなかったため、2要因の主効果を検討したところ、ナショナリズムの主効果は認められず、愛国心の有意傾向の主効果がみられた（ $F(1,235)=2.76, p<.10$ ）。つまり、自尊感情に関しては、ナショナリズムの高低では差が見られず、愛国心の高群の方が低群に比較して得点が高いことが示された。

以上の結果から、愛国心の高さは自尊感情の高さと関連し、ナショナリズムの高さは自己愛の高さおよび仮想的有能感の高さと関連することが示された。

Table 3 愛国心とナショナリズムのバランスと自己愛, 仮想的有能感, および自尊感情の関連

愛国心 ナショナリズム 人数	低 低 n=76	低 高 n=46	高 低 n=37	高 高 n=81	主効果
自己愛総合	81.4 (13.8)	83.9 (15.6)	81.0 (17.6)	88.7 (16.9)	ナショナリズム高群>低群*
注目・賞賛	28.0 (7.10)	29.8 (7.55)	29.2 (8.36)	31.9 (7.96)	ナショナリズム高群>低群*
優越・有能	23.9 (5.93)	24.6 (5.79)	23.3 (6.72)	25.6 (6.61)	ナショナリズム高群>低群†
自己主張	29.4 (5.50)	29.5 (5.88)	28.5 (6.58)	31.2 (6.72)	ナショナリズム高群>低群†
仮想的有能感	29.8 (6.70)	31.4 (7.11)	27.7 (7.94)	30.8 (6.95)	ナショナリズム高群>低群*
自尊感情	27.9 (5.85)	28.2 (5.56)	28.7 (7.28)	30.3 (6.94)	愛国心高群>低群†

† $p < .10$ * $p < .05$

(カッコ内は標準偏差)

(4) ナショナル・アイデンティティ尺度の項目ごとの分析

ナショナル・アイデンティティ尺度は愛国心について5項目、ナショナリズムについて4項目計9項目から構成されるが、その項目ごとに回答の傾向を検討した。その結果、愛国心の5項目に関しては、否定的な回答がすべて1割以下であり、どちらとも言えない、を含めると、9割以上の調査対象者が日本の国に対して肯定的な感情を抱いていることが示された (Figure 1)。また、一般に項目の回答平均値に標準偏差を加えた値が最大値 (この場合は5) を超える場合は天井効果があると判断されるが、愛国心尺度の5項目中「日本人であることに、幸せを感じている」「日本人でよかったと思う」「日本が好きだ」「日本にはあまり愛着を持っていない (逆転項目)」の4項目で天井効果がみられた (Table 4)。このように天井効果がみられるほど本研究の対象である大学生は、自分の属する国である日本に対して、好意的に捉える度合いが強いことが示された。なお、本研究では日本のどのような側面に対して愛国心を感じるかは尋ねていないが、田辺 (2010) の調査によると、日本人は自国の文学や芸術、科学技術、スポーツなど文化的な分野について誇りを抱く一方で、世界への政治的影響力や軍事力など対外的な面については誇りを抱かない人が比較的多かったことが報告されている。日本人の愛国心が日本のどのような要因によるのか、より詳細な検討が必要である。

一方、ナショナリズム尺度の4項目に関して検討した結果、これらの項目を肯定する率は愛国心よりは少なく、またどちらとも言えないという回答が全体的に多かった。また、愛国心尺度の項目と異なり、ナショナリズム尺度では天井効果がみられる項目もなかった。田辺 (2010) は、日本では自国を他国より良いと考える優越感を持っている人が8割

以上と非常に多いが、露骨な自国中心主義的な意見については散らばりが大きく、意見が分かれていると報告している。本研究でも、例えば、日本人は他の民族に比べて、とりたてて優秀な民族だとは思わない人が29%、優秀だと思う人が28%、とほぼ同数であり、そ

Table 4 ナショナル・アイデンティティの質問項目の平均値 (* 逆転項目)

	平均値	標準偏差
【愛国心項目】		
1) 日本人であることに、幸せを感じている	4.4	0.78
2) 日本人でよかったと思う	4.5	0.79
3) 日本人であることを誇りに思う	3.9	0.93
4) 日本が好きだ	4.4	0.82
5)* 日本にはあまり愛着を持っていない	4.1	0.92
【ナショナリズム項目】		
6) 日本の経済力を考えれば、国連や国際会議における日本の発言権はもっと大きくあるべきだ	3.4	0.95
7) 日本が戦後驚異的な成長をとげたのは、日本人が勤勉であったからだ	3.6	0.93
8)* 日本人は他の民族に比べて、とりたてて優秀な民族だとは思わない	3.0	1.00
9) 日本が貿易で利益を上げているのは、優れた技術と努力の結果である	3.8	0.86

注：得点範囲は1～5(* 逆転項目)， 1：全くそう思わない， 2：どちらかといえばそう思わない， 3：どちらともいえない， 4：どちらかといえばそう思う， 5：非常にそう思う

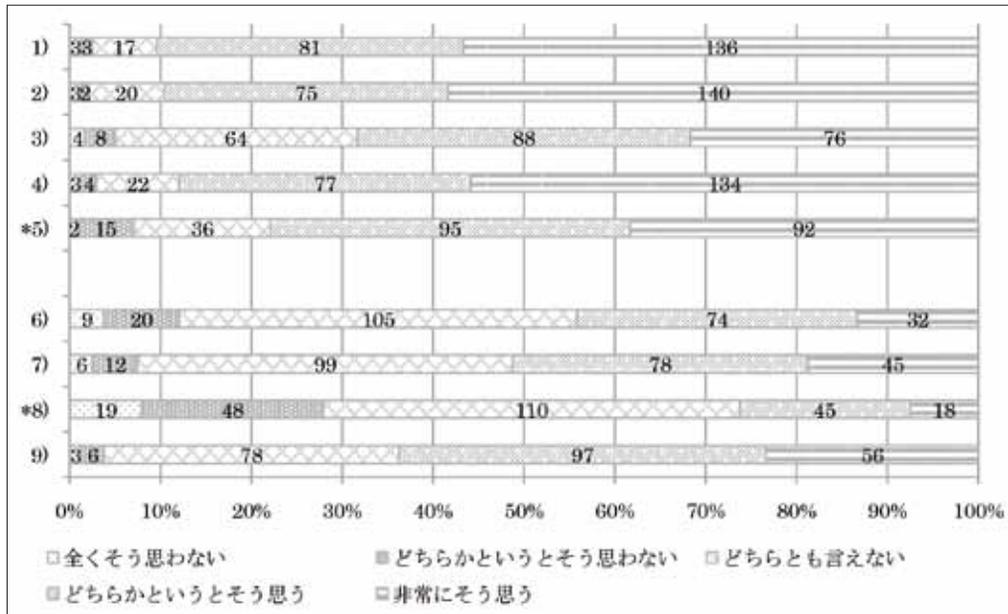


Figure 1 ナショナル・アイデンティティの質問項目に対する回答率 (* 逆転項目)

れ以外のどちらとも言えないと答えた人が43%と、ばらつきがみられた。なお、田辺(2010)による国際比較によると、他国より自国が一般的に良い、と考える人の割合は日本が82.7%、オーストラリアが82.6%、アメリカが79.5%、ドイツが34.4%と日本が4カ国中最も高いことを報告している。

以上の結果から、日本人の9割以上が愛国心を質問する項目に対して肯定的に答えており、日本人で日本が嫌いな人は1割以下であることが示された。また、ナショナリズムに関しては、愛国心ほどは肯定する人は多くなく、露骨に自国の優越性を感じる人は少数派であることが示された。

(5) ナショナル・アイデンティティ尺度それぞれの項目と自己愛、仮想的有能感、および自尊感情との関連

次に、ナショナル・アイデンティティ尺度の項目ごとに自己愛、仮想的有能感、および自尊感情との関連を検討した。自己愛と愛国心尺度の項目ごとの関連を検討すると、日本人であることに「誇りに思う」や日本が「好きだ」というような日本に対する積極的な肯定表現をしている項目に対して特に自己愛との関連がみられたが、日本人であることに「幸せを感じている」や日本人で「よかったと思う」など受動的な肯定表現をしている項目とは自己愛と関連が見られなかった。このことから、自己愛の強さは受動的な肯定感ではなく、より積極的な愛国心につながることを示された。自尊感情に関しても自己愛と同様の傾向が示された。一方仮想的有能感に関しては、愛国心の項目と有意な相関を示すものが一つもなかった。なお、先に述べたとおり、愛国心尺度の項目に関しては、5項目のうち「日本人であることに、幸せを感じている」「日本人でよかったと思う」「日本が好きだ」「日本にはあまり愛着を持っていない(逆転項目)」の4項目で天井効果がみられたため、それぞれの相関係数が小さめになった可能性が考えられる。

また、自己概念とナショナリズム尺度の項目ごとの関連を検討すると、自己愛総合得点が高いとナショナリズムのほとんどの項目が高いことが示された。上で示した愛国心との関連ともあわせて考察すると、自己愛が強いと自分の国に対する受動的な肯定感よりも積極的・排他的な愛情が高まると考えられる。自尊感情に関しては、自己愛総合得点における相関係数よりもやや低い値であるが、ほぼ同様の傾向がみられた。一方、仮想的有能感に関しては愛国心とは有意な関係が見られなかったが、ナショナリズムの項目とは有意な正の相関を示す項目が見られた。その項目が「日本人は他の民族に比べて、とりたてて優秀な民族だとは思わない(逆転項目)」であった。この項目のみが今回のナショナリズム尺度の中で、他民族との比較をしたうえでの優劣に言及しており、ナショナル・アイデン

Table 5 ナショナル・アイデンティティの尺度項目ごとの自己愛, 仮想的有能感, および自尊感情の相関

	自己愛 総合	注目 賞賛	優越 有能	自己 主張	仮想的 有能	自尊 感情
日本人であることに幸せを感じている	.12	.12	.11	.05	.01	.12
日本人でよかったと思う	.12	.13*	.11	.04	-.06	.12
日本人であることを誇りに思う	.24***	.25***	.16*	.15*	-.03	.16*
日本が好きだ	.20**	.26**	.10	.09	.02	.15*
日本にはあまり愛着を持っていない	.12	.16	.01	.08	-.02	.10
日本の経済力を考えれば, 日本の発言権はもっと大きくあるべきだ	.20**	.15*	.14*	.18*	.11	.18**
日本が戦後驚異的な成長をとげたのは日本人が勤勉であったからだ	.21**	.19**	.20**	.09	.06	.14*
日本人は他の民族に比べて, とりたてて優秀な民族だとは思わない	.12	.12	.13	.03	.14*	.12
日本が貿易で利益を上げているのは優れた技術と努力の結果である	.20**	.21**	.16*	.09	.13	.11

* $p < .05$ ** $p < .01$

ティティ尺度項目中平均値も最も低く, 標準偏差が最も大きい項目であった。つまり, この項目がナショナリズムの強さを最も表し, 得点分布としても最も正規分布に近いため, 項目としての適切性も高いと考えられる。そのようにナショナリズムの強さを適切に表す項目に関して, 仮想的有能感で有意な相関がみられ, 自尊感情や自己愛総合得点とは有意な相関は見られなかったことは興味深い。

4. 総合考察

ナショナル・アイデンティティと自己概念との関連に関する検討の結果, 愛国心が強いと自己愛も高く自尊感情も強いが, 仮想的有能感とは有意な関連が見られなかった。一方ナショナリズムの強さとは自己愛, 仮想的有能感, 自尊感情と正の相関関係が示された。つまり自分を好きであったり自分に自信のある人は, 自分の属する国に対しても好意を持ち他の国より優れていると感じる傾向があることが示された。これは, 自分の所属する国を自分の一部のように一体感を感じ自己対象としてとらえている (Kohut, 1971) ことから, 自己愛の高さが愛国心やナショナリズムにつながったと考えられる。一方, 仮想的有能感に関しては, 愛国心とは有意な関連がみられず, ナショナリズムとは正の相関が示された。つまりこの二つを区別するものとして仮想的有能感が有力であることが示された。仮想的有能感の強さは根拠のない優越感の強さではあるが, それは自分に対

する自信につながらない。そのため、仮想的有能感が強くても自国に対する愛国心にはつながらないが、自国の優越性の認識であるナショナリズムを高めたと考えられる。また、自己愛と自尊感情の違いが、相関による検討では見いだされなかった。しかし、愛国心とナショナリズムは中程度の正の相関関係にあるため、自己愛と自尊感情が愛国心とナショナリズムの両方と正の相関がみられたことが考えられる。

そこで愛国心尺度とナショナリズム尺度それぞれの高低で2群に分けて2要因2水準分散分析でその違いを検討した。その結果、愛国心の高さに関しては、自尊感情の高さとのみ関連が示された。自尊感情は適応性の指標として使われることが多いが、愛国心の高さが自尊感情の高さと関連したことは、愛国心が精神的健康と関連する可能性が考えられる。一方、ナショナリズムの高さは自己愛の高さと仮想的有能感の高さと関連し、自尊感情の得点とは関連が見られなかった。これはナショナリズムが不適応性と関連することが考えられる。自己愛尺度の下位尺度の中でも、注目・賞賛欲求は精神的不適応と関連することが知られているが(小塩, 2001), ナショナリズムの高低でこの注目・賞賛欲求で最も自己愛尺度の下位尺度の中でも差が大きかったこともそれを裏付けていると考えられる。以上のことから、自分に対する意識や態度がそのまま自分の所属する国に対する意識や態度に反映されることが本研究では示された。

また、日本人の9割以上が愛国心を質問する項目に対して肯定的に答えているが、ナショナリズムに関しては、愛国心ほどは肯定する人は多くなく、露骨に自国の優越性を表明する人は少数派であることが示された。本研究の結果は限られた地域の大学生対象のものであるため、一般化するには限界があることが考えられる。しかし2006年に行った田辺(2008)による成人を対象とした調査によると、日本人がもつ日本への好感度は年齢が上がるほど高くなることを報告している。つまり、本研究の対象者は社会全体で日本への好感度が最も低い世代と考えられるが、それでもこのような結果になったことは、おそらくさらに上の世代では日本に対する愛国心がより強いことが考えられる。このような世代による愛国心やナショナリズムについての検討も今後の課題として残されている。

2006年の教育基本法改正、2007年の学校教育法改正では、「豊かな情操と道徳心」「公共の精神」「伝統と文化を尊重」といった文言が並び、愛国心や道徳心が強調されたことが話題になった(山村, 2011)。さらに、文部科学省の新しい学習指導要領案では、道徳の授業における「愛国心」の記述が、小学校3年生から小学校1年生に早まることが発表されている(朝日新聞, 2015)。以上述べたように、日本では愛国教育を充実させる方向に進んでいる。しかし、特別な愛国教育をさらに付け加えなくても、本研究で示された通り本研究の対象者である大学生の大多数は、愛国心を持っているのである。しかも、それに

比べるとナショナリズム的な意識は強くないことが示されている。もし愛国教育をするのなら、ナショナリズム的な教育に対しては慎重になる必要があるだろう。本研究は横断的研究のため、因果関係についての結果は得られていないが、分散分析の結果自己愛は愛国心とナショナリズムの両方の高さに関連するのに対し、自尊感情はナショナリズムではなく愛国心の高さのみと関連することから、自分のことが好きになることよりも、自分に自信を持つことの方がナショナリズムを高めずに愛国心を高めることに有効である可能性が示唆された。また、日本では、ナショナル・プライド（愛国心に近い概念）と自国中心主義（ほぼ本研究におけるナショナリズムと同義）が正の相関を示す一方、アメリカやオーストラリアでは負の相関か無相関であった（田中，2010）。そのため「健全なナショナリズム」という言説が日本では排外主義と融合しやすい、と述べられている。本研究においても愛国心とナショナリズムは中程度の相関を示した。つまり愛国心が自国中心主義や他国排外性につながる危険がある。そのため、もし教育により愛国心を高めようとするのであれば、それがナショナリズムを高めることにつながらないように配慮が必要であろう。

最後に、本研究の全体テーマである EU との関連について言及したい。EU 加盟国は現在28カ国であるが、その中でも日本とドイツの比較を行う。ドイツはEUの中心国としての道を歩んでおり、また日本とドイツとはナショナル・アイデンティティを考える上で、多くの共通点があるためである（田辺，2010）。日本もドイツも第二次世界大戦の敗戦国であり、国（ネーション）の類型としては両国とも民族型ネーション（民族的同一性や血統などの帰属的属性を構成要素とするネーション）の典型であること、公用語が一つであること、現実の政策には多文化的なものが採用されていないことが挙げられる。さらに、両国とも「自国中心主義は良くない」と一定程度思っている一方で、自国民と非自国民の区別をある程度厳しくする態度を示す人々が多いことが報告されている。

ナショナル・アイデンティティの国際比較をした田辺（2010）によると、「他国より自国が一般的に良い」と感じている人の割合が日本・ドイツ・アメリカ・オーストラリアの4カ国の中で日本が最も高い（82.7%）ことが報告されている。一方、ドイツではこの値が34.4%と極端に低い。その理由として国家を称揚する心性がひいてはナチス・ドイツを生み出し、アウシュビッツを作り上げた、という意識を多くの人が抱いており、自分の国を「一般的に良い」とする肯定的な意識を持ちにくいためではないかと分析されている。実際、自国に関して誇りを感じる分野についての国際比較では、特に両国間で差がみられたのが歴史についてであり、日本では自国の歴史について誇りに思うと答えた割合が68.3%であるのに対し、ドイツでは30.3%と顕著に低い。なお、歴史に誇りを持てると答えている日本人が約7割にもなることから、これまでの教育が歴史に誇りを持ってない教育

になっているわけではないことが示されている。

「他国より自国が一般的に良い」という項目は田中の研究では「自国中心主義」を測定するものとして使われている。つまりこの項目は「愛国心」よりも他国に対して自国の優位性の感情を示す「ナショナリズム」を表していると考えられるであろう。今後、歴史に対する誇りとナショナリズムの高さが実際にどのように関連するか検討することは、重要な課題であろう。もし歴史に対する誇りを高めることが愛国心だけではなくナショナリズムを高めることにつながるのであれば、他国に対する排外性に結びつく可能性があるため、そのための配慮が必要とされることが考えられる。

参考文献

- Akhtar, S., & Thomson, J.A. (1982). Overview: Narcissistic personality disorder. *American Journal of Psychiatry*, 139, 12-20.
- 朝日新聞 2015年2月25日朝刊 教育面
- Dowds, L., & Young, K. (1997) National Identity. *British Social Attitudes 13th Report*, 141-60.
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽 (1992) セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求 ナカニシヤ出版
- Freud, S. (1914) On narcissism: an introduction. in *Complete Psychological Works*, standard ed, vol. 14, London, Hogarth Press, 1949 (懸田・高橋他訳 1969 ナルシズム入門 (フロイト著作集第5巻) 人文書院)
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2004) 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. *心理発達科学* 51, 1-8.
- 唐澤 穰 (1993) A survey study assessed nationalistic and patriotic attitudes among Japanese respondents. *愛知学院大学文学部紀要* 23, 25-33.
- Karasawa, M. (2002) Patriotism, nationalism, and internationalism among Japanese citizens: An etic - emic approach. *Political Psychology*, 23, 645-665.
- 香山リカ (2002) ぶちナショナリズム症候群：若者たちのニッポン主義 中央公論新社.
- Kohut, H. (1971) *The Analysis of the Self*. New York, International Universities Press. (水野信義・笠原嘉監訳 1994 自己の分析 みすず書房)
- Kosterman, R., & Feshbach, S. (1989) Towarda measure of patriotic and nationalistic attitudes. *Political Psychology*, 10, 257-274.
- 真鍋一史 (1999) ナショナル・アイデンティティの構造 - ISSP 国際比較調査のデー

- 夕解析 関西大学社会学部紀要, 82, 145-156.
- 村田光二 (2007) アテネ・オリンピック報道が日本人・外国人イメージに及ぼす影響, 平成16年度 - 平成18年度科学研究費補助金 (基盤研究C) 研究成果報告書.
- 大澤真幸・塩原良和・橋本努・和田伸一郎 (2014) ナショナリズムとグローバリズム - 越境と愛国のパラドックス ワードマップ 新曜社
- 小塩真司 (1998) 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 日本教育心理学研究, 46, 280-290.
- 小塩真司 (2001) 自己愛傾向が自己像の不安定性, 自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, 10, 35-44.
- Rosenberg, M. (1965) Society and the adolescent self-image. Princeton : Princeton University Press.
- 坂西友秀・王晨 (2007) 「人種」・「民族」ステレオタイプと「ナショナル・アイデンティティ」-- 探索的検討, 埼玉大学紀要 教育学部 56(1), 39-57, 2007
- 佐久間勲・藤島喜嗣 (2011) ワールドカップサッカー・ドイツ大会における日本代表の成績の原因帰属: 愛国心とナショナリズムの影響, 湘南フォーラム, 15, 117-126.
- Stolorow, R.D. (1975) Toward a functional definition of narcissism. International Journal of Psycho-Analysis, 56, 179-185.
- 田辺俊介 (2010) ナショナル・アイデンティティの国際比較 慶応義塾大学出版会
- 田辺俊介 (2008) 「日本人」の外国好感度とその構造の実証的検討: 亜細亜主義・東西冷戦・グローバリゼーション, 社会学評論 59(2), 369-387.
- 山本真理子・松井豊・山成由起子 (1982) 認知された自己の諸測面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 山村和世 (2011) リベラリズムの教育論と愛国心教育 日本教育社会学会大会発表要旨集録, 63, 74-75.